創立1880年
YMCA
東京YMCA
2013 7/8月号
発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

山中湖センターの桟橋から見る富士山

人を育てる施設として
山中湖センター90周年
１００年に向け施設整備スタート

富士山が世界遺産に登録された今年、東京ＹＭＣＡのである。

山中湖センターは開設90年を迎えた。富士山が裾野まで見渡せる絶景のキャンプ場である。澄みわたる山中湖には逆さ富士。早朝には暁に染まる紅富士。90年の間、多くの人がここでかけがえのない時を過ごし、育ってきた。

教育キャンプ場としての歴史

このキャンプ場は１９２３（大正12）年に、ＹＭＣＡの目指す、精神、知性、身体のバランスのとれた「全人教育」を展開する生活の場として設置されたものである。

その前年、日本ＹＭＣＡ同盟が、少年事業の一つとして初めて「全国中等学生キャンプ」を日光で開催した。これは、北米ＹＭＣＡや弓道の矢場も設置。日本から来日していた協力主事初の常設キャンプ場として鈴木榮吉主事や委員による整えた後、それをすべて東実験的な試みだった。京ＹＭＣＡに寄付した。

このキャンプの報告会に その後も彼らは研究を重出席していた東京ＹＭＣＡ ね、キャンプを、ＹＭＣＡ少年事業委員の小林彌太郎 の「全人教育」にとって欠（写真）は、翌１９２３年 かせない活動として確立し春、「中学生のためにキャ ていった。ンプ地として用いたい」 キャンパー層は徐々に広と、山中湖畔に６０００坪 がり、31～33年には、大食も充実していった。31年に 堂兼集会棟と10棟のキャビは、今日まで続く「家族キ ンが建てられ、プログラムャンプ」が始まった。

◇　◇　◇

戦争中は、カタカナが追放されて「山中湖山荘」となる。キャンプは「錬成会」などと名称を変えながらも継続された。しかし41年にはほとんどのキャンプが国策により中止され、45年には陸軍通信隊がこのキャンプ場に駐屯した。

戦後は、ＧＨＱが農地法を発令し、〝現に耕作している者に土地を与える〟としたため、キャンプ地内で村人が耕作を始め、東京ＹＭＣＡはこのキャンプ場の所有権を失いかける事態となった。そこで山中キャンプ村長を務めていた職員の原直治郎は、妻と1歳の子を連れてキャンプ場に移り住み、地元の行政当局を相手に5年にわたる交渉を重ねた。冬はマイナス20数度。布団の周りが霜だらけだったというキャンプ場の キャビンに住み、この地を守ったのである。

誰にも優しいバリアフリー施設

戦後の復興期には、会員活動が盛んになると共に山中キャンプも発展し、多くの活動が生み出された。

特にこのキャンプ場は、平坦な地形に恵まれているため、他に先駆けて、障がい者や幼児のキャンプが始められた。「手足の不自由な子どものキャンプ」は今年で開催57年目になる。障がい児と健常児との統合キャンプ「フレンドシップキャンプ」はこの地で生まれて37年を迎える。70年代からは幼児のキャンプが始まった。障がい者に優しい施設は、誰にとっても過ごしやすい。

１９８０年には、東京ＹＭＣＡ創立１００年を記念して現在のメインホールが建てられた。95年にはキャビンを改築、２００７年には大浴場が建設される。すべてバリアフリーで、車椅子のままカヌーに乗れるなど、工夫がされている。これらは多くの募金と知恵とでつくられた。東京ＹＭＣＡの貴重な資産である。

◇　◇　◇

山中湖センターは、人を育て、福祉に寄与するというＹＭＣＡの使命を実現する場として形作られてきた。その歴史は、青少年を育てようとする多くの熱意ある人の歴史でもある。

次の１００年に向けて、この施設を発展・継承していくことが今、期待されている。

（広報室）

（＝2面へ続く）

〈注〉『東京ＹＭＣＡ山中キャンプの75年』（齊藤實著、東京ＹＭＣＡ総合研究機構紀要6）他を参考にしました。

開設当初のテントキャンプ

＜小林彌太郎＞
1888～1969年
日本橋の裕福な砂糖商の長男として生まれる。20歳から2度アメリカに留学し、哲学者で教育学者のジョン・デューイに師事。帰国後は山中湖だけでなく、野尻キャンプ場も東京ＹＭＣＡに寄付されたほか、教会や愛隣団、玉川学園、成城学園などで数々の社会奉仕活動を行った。50歳からは、信仰上の転機によりひたすらに教会に奉仕した。

理事・監事・評議員 改選 新体制へ

２０１１年4月1日に公益財団法人として認定され、新しい理事会と評議員会のもと公益財団法人東京ＹＭＣＡとして出発した。理事・監事任期は2年、評議員任期は4年となり、この２０１３年5月30日開催の定時評議員会にて理事・監事任期満了となり、新たな改選が行われた。新理事・監事は以下のとおりとなった。

【理事】
＊代表理事　廣田　光司
＊理事　飯　靖子　河本　晶介
中井　博雅　古田　和彦
＊業務執行理事　堀口　廣司　本田　真也
【監事】
寺門　文雄　本行　輝雄

なお、長年にわたりご指導いただいた茅野徹郎氏、郡山千里氏は退任となった。茅野氏は、公益財団法人取得に向けて牽引の役割を果たされ、郡山氏は広報等指導をいただいた。ご奉仕に深謝する。

評議員は任期途中であるが、飯　忍氏の逝去、井上史郎氏の辞任に伴い、学校法人東京ＹＭＣＡ学院長の湯浅慶氏が同日の評議員会にて新評議員に選任された。評議員は以下のとおりとなっている。

＊会長　勝田　正佳
＊副会長　笈川　光郎　田中　壽夫
＊評議員　上田　晶平　上原　靖弘
尾崎久美子　小原　武夫
久保田貞視　栗田　茂
中内俊一郎　松岡　信之
松下　欽三　宮内　友弥
桃井　明男　山崎美貴子
山本　和　湯浅　慶

東京ＹＭＣＡの使命達成を会員共々推進していく公益財団法人としてさらに歩みを進めたい。

（本部事務局長　本田　真也）

山中湖センター90周年記念
施設整備募金のお願い

山中湖センターが、これからも東京ＹＭＣＡの使命を担い、多くのキャンパーや指導者・ボランティアを育てる施設であり続けるために、この度大規模な施設整備を行います。皆様のご支援を心よりお願いします。

山中湖センター90周年記念施設整備募金
委員長　山本　和
公益財団法人東京ＹＭＣＡ
代表理事・総主事　廣田 光司

【施設整備工事内容】
●キャビン床張替　●テラスタイルの張替
●メインホール・宿泊棟・本館の屋根葺き替え
●メインホール・宿泊棟・本館の外壁防水塗装
【募金期間】2013年6月1日～12月末日
【募金目標額】2,250万円
【募金方法】
三菱東京ＵＦＪ神保町支店　普通　1376555
公益財団法人東京ＹＭＣＡ
郵便振替　口座番号 00110－2－64598
東京ＹＭＣＡ山中湖センター施設整備募金
【お問合せ】
90周年記念施設整備募金事務局
（会員事務局／ＦＤ室）
tel.03-3615-5568　fax.03-3615-5578
メール：kaiin@tokyo.ymca.or.jp

【山中湖センター90周年記念施設整備募金委員会】
委員長：山本　和
副委員長：高橋　伸
委　員：茅野徹郎、飯　靖子、上田晶平
菰渕光彦、原　博直、佐伯　紘
上原奈奈、喜多隆正、小山久恵
淺羽俊一郎

赤▽三角

私が山中湖畔に立った最初は１９４７年８月である。早朝、富士の肌は赤く染まった。湖上の逆さ富士も見た。ここは神の国か、と思った。戦後再開されたばかりの東京ＹＭＣＡ会員キャンプに参加した第一印象である▼東京ＹＭＣＡの周囲一面は、焼け野原にバラックが散在した頃である。キャンプを終えて帰京するキャンパーにデイレクターは聖句を贈るのが常であった。「汝ら生命の言を保ちて、世の光のごとく此世に輝く」。新約聖書ピリピ人への手紙２章15節である。私は、この夏の楽しく甲斐甲斐しく振舞ったキャンプ生活で、新たな生き方を学んだ。仕事を変えてＹＭＣＡ職員となる契機を得た▼当時、キャンプは国鉄中央本線で行った。大月駅で乗換え、富士吉田駅（現・富士山駅）下車。ガタゴトバスで50分。終点旭日丘から歩いた▼この地をＹＭＣＡが用いる直前１９２３年4月に下検分が行われた。小林彌太郎ほか３名。御殿場線駿河小山駅を下車、三国峠を越えキャンプ地まで5時間歩いたと三隅達郎は著書『キャンプに生きる』に書いた。これが当時の最短コースだったという。参加者募集案内には「御殿場駅から自動車40分。篭坂峠を越えて湖畔を半周してキャンプ地へ」と書かれている▼青成部・少年部が今も在ったら、「山中キャンプ90周年記念峠越え参加者募集」が企画されたに違いない。（東京ＹＭＣＡ元副総主事　齊藤　實）

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

人を育てる施設として　山中湖センター90周年

＝1面より

山中キャンプで育った人　山中キャンプを培った人

山中湖で幼少期を過ごし、山中家族キャンプを支える
家族キャンプと山中の想い出

原　博直さん

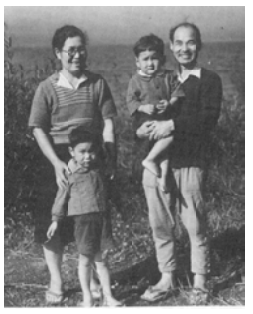
山中家族キャンプ委員長。原直治郎氏の次男。10歳まで山中湖で暮らした。

私は生まれて直ぐに父直治郎が管理人をやっていた山中湖のキャンプ場で生活するようになった。当時は戦後の食糧難、我が家ではヤギを飼っていて私はその乳を飲んで育った。独特の臭いがあり決して旨い物ではなかったが他に食べ物も無いので良くそれを飲んだ。そのおかげで小学校入学時には学年で一番後ろ。体が大きかったのでよそ者ではあったがいじめられる事もなかった。

山中湖の生活は冬が一番大変。一晩に雪が30センチぐらい積もる事は良くあり母子3人で今のメインホール付近にあった管理人住宅から表の道路まで雪かきをしてから学校に行く。春になるとこぶしの花が咲き、雪が消えて長靴をはかなくてすむことがなぜか無性にうれしかった。

6月になると父親が夏のキャンプの準備で山中湖に帰ってくる。ボートに細い麻紐を詰めてパテを塗りペンキを塗りなおして水漏れ対策完了。夏になると多くのキャンパーが来る。そんな中で家族キャンプがとても楽しみだった。子どもたちもいっぱいいて一緒に遊んでもらった。東京に住むようになってからはキャンパーとして毎年参加していた。社会人となってからはしばらくキャンプをお休みした時期があったが、結婚して下の子どもが生まれてから、子どもに私が育った環境を見せたくてキャンプに復帰した。

その山中家族キャンプも今年で82回を迎える。この家族キャンプは参加したキャンパーを大きな一つの家族と考えてプログラムを作っており、リピーター率の高いことが特徴。是非一度ご参加を。



1950年の原さん一家。右から直治郎さん、博直さん、直義さん、由子さん

開催57年、多数の障がい児とボランティアを育てる
手足の不自由な子どものキャンプ

内山　雅博さん

手足の不自由な子どものキャンプ　スタッフ

初めて山中湖センターと出会ったのは、障がい児キャンプのボランティアとして訪れた時だった。代々のキャンプディレクターから学んだ、キャンプ論、グループワーク、人と人との関わり、福祉とは、そしてキャンプファイヤー、野外調理。それは青春のまっただ中にある私に新鮮で大きな衝撃を与えた。それは、子どもたちの成長の機会としてだけでなく、私たちにとっても成長の機会であったことに今気づく。キャビンとメインホール。3人のキャンパーが入るのがやっとの小さなお風呂、生い茂る木々とグランドの緑。ここから数え切れないほどの障がいを持つ子どもたちとボランティアが巣立っていった。

時代は変わり山中キャンプも大きく変わった。それは、障がいを持つ者にとっての過ごしやすい施設と環境は、障がいを待たない私たちにとっても同じであることの証明でもあった。キャンプサイトは、いつも誰でも優しく迎えてくれる。時代は変わってもキャンプの理念は変わることがない。あれから40数年、障がいを持つ子どもたち、ボランティアの学生たちは今どうしているのだろうか。そのことが今私たちに問われている。

手足の不自由な子どもたちと　健常の子どもたちの統合キャンプ
フレンドシップキャンプ

鹿島　進さん

NPO法人フレンドシップキャンプ理事

「フレンドシップキャンプ」は、小学3年生～高校3年生の、手足の不自由な子どもたちと、健常の子どもたちが共に5日間を過ごし、友情を育む統合キャンプです。キャンプ場の90年の歴史には及びませんが、今年で37年目を迎える「フレンドシップキャンプ」の歩みも、山中のキャンプ場と共にあります。当初は、メモリアルキャビンとして残っている小屋に、車椅子の子も寝泊りしていました。段差が大きく、道も凹凸で、介助はリーダーの体力勝負でした。

一方変わらないのは、大きな木の下の広場で遊ぶ子どもたちの姿。障がい児と健常児が、どちらも楽しめるようにルールを工夫して、夢中で遊ぶうちに自然と仲良くなる。違いを認め思いやる、そんな原体験が山中の風景とともに参加者の心に刻まれています。

そして、山中と言ってみんなが思い出すのはキャンプソング。食堂に響く大合唱は、様々な人が共にいることの喜びを実感させてくれます。キャビンでも湖畔でも野外調理でも、いつもどこかから歌声が聞こえてくるのも、フレンドシップキャンプの素晴らしい伝統です。

山中湖キャンプに感謝して、60年余り交流を続ける
トーテムグループ

齋藤　昭七さん

東京ＹＭＣＡ元職員

私は１９５９年から数年間、家族キャンプの担当主事アシスタントをし、その後１９８１年から４年間、駐在職員として山中湖キャンプ場に赴任しました。ここで多くの方々と出会い、お世話になったことは忘れられない思い出であり良い経験でした。

中でも「トーテムグループ」は、毎年春と秋の２回、トーテムポールの塗装修理をしてくれました。このグループは、「キャンプに育まれた者・キャンプをより良くしようとする者の集い」として戦争直後の１９４９年に作られ、キャンプで芽生えた友情を深めるため、毎月レクリエーションや読書会などを行ってきました。現在も年に２～３回会合があり、私も今日まで多くの方々とお交わりをできましたこと感謝です。

２００３年（平成15年）には、老朽化した第2代トーテムポールが、何時までも我々の心に残るよう願ってワークキャンプを行い、キャンプファイヤーで燃やしました。併せて第3代トーテムポールの修理・塗装もしました（写真）。

今後も山中湖に、多くの方々が集うことのできますことを心から願っています。

⇒第3代トーテムポールの修理・塗装作業の様子

音を愛する仲間が集う「山中湖音楽村」

青山　南海男（なみお）さん

山中湖音楽村　村長

静けきまほろば　山中の湖畔に
今集いし我ら若者
燃やす若い光を　歌う心の歌を

【１９６６年　作詞：殖栗信夫　作曲：小室等　他】

この歌は今年の11月に30回を迎える「山中湖音楽村」の「村歌」です。70を過ぎた私には「我ら若者」の歌詞は少々抵抗を感じますが、この村歌は１９６６年から東京ＹＭＣＡ少年部ＯＢと多摩美術大学のフォークとカントリーのメンバーを中心に5年間開催された「野尻音楽村」の中で作られたものです。14年の中断後、１９８４年山中湖に場所を移してファミリーキャンプとなり、「野尻の森」を「山中の湖畔」に歌詞を変え、歌い継がれています。

音楽村ではメインプログラムのコンサートの時間以外にも、キャンプサイトのあちこちから楽器の音や歌声が聞こえます。多くのファミリーが集まり、音楽が得意な人もそうでない人も溶け込みます。こうした音楽を通じた交流を支えているのは恵まれたロケーションです。何といっても世界遺産の富士と湖、それに森に囲まれた場所でのコンサートは、都内のライブハウスでは絶対に味わえないものです。山中湖センターは古稀を過ぎた老人をいつでも直ぐ少年に戻してくれる素晴らしい場所、「まほろば」なのです。

施設整備ワークキャンプを行い、山中湖センターをサポート
東京サンライズワイズメンズクラブ

菰渕　光彦さん

東京サンライズワイズメンズクラブ

東京サンライズワイズメンズクラブは１９９０年5月、山中湖センターで1泊チャーターナイトキャンプによりスタートし、今年25周年を迎えました。91年からは「山中湖センターワークキャンプ」を開始、環境整備サポートをしています。これまでにエントランスゲート作りを始め、グリーンチャペル設営、スモークハウス作成、キャビン室内整備・外壁塗装、桜の植樹、看板設置、かまど作成、芝の苗植え、キャビン前の敷石補修・手すり掛け替えなどを実施してきました。ワークには、広島や京都など他のワイズメンズクラブも合流し、交流を深める場ともなっています。

また92年からは、教会のない山中湖地域の小学生に向けて〝クリスマスは何の日なのか〟を知ってもらうため、「地域の子どもたちのためのクリスマス」を行っています。ビンゴによるプレゼントも喜ばれ、5年前からは富士五湖クラブと共にクリスマスページェントを演じ始めました。

今年は空き缶プルトップ収集により得た車椅子を寄付します。山中湖センターを利用する多くの方に、心に残る日々を過ごしていただけるような環境整備サポートを東京サンライズワイズメンズクラブのＹＭＣＡ支援活動の中核として、今後も継続していきます。

今なお心に生きる体験　山中湖を想う卒業生たち
ＥＳ（英語学校）交友会

松沼　信市さん

東京ＹＭＣＡ
ＥＳ交友会代表幹事

東京ＹＭＣＡ英語専門学校は古くから、カリキュラムの一つとして学校独自のキャンプを開催し、学生の参加を奨励していました。私も約56年前、初めて山中湖を訪れました。鬱蒼と繁った樹木に囲まれ、広大な芝生のグランドに囲まれた中にキャビンが点在して、キャンプ場としてこれ以上の好条件は無いと思いました。規則正しいスケジュールの中でスポーツ、ゲーム、ボート、水泳、または班（キャビン）対抗の仮装行列など、今まで経験したことが全くない内容にビックリ仰天でした。また、「懲罰」と呼ばれる罰ゲーム、爆笑連続の珍喜劇、真夜中に突如として襲来するストームなど、初参加の私にとっては未経験の数々にただ驚きの連続でした。これらはすべてキャンプリーダーたち（先輩）の指導並びに作為によるもので、キャンパーは拍手喝采大満足の様子でした。

そこには、今、日本中が見失っている物や、心に残る温かさが間違いなく現在に至るまで継続しているのだと思えてなりません。英語専門学校ＯＢたちは、この経験を今も大切にしており、昨年もボートを寄贈するなど、山中湖の発展を願っています。

石巻支援センタースタディーツアー

支援先を訪問　被災を実感

6月22～23日、10名の会員がYMCA石巻支援センターを訪問し、被災地の現状に触れ、東京YMCAによる支援活動の現場を見学した。参加された新澤誠治氏（東京YMCA保育事業アドバイザー）の感想文（一部要約）をご紹介したい。

女川町での被災現場を視察する会員たち

支援の必要あらためて実感

新澤　誠治

日和山公園から被災地を一望した後、2台の車に分乗して各地を回りました。多くの方が亡くなった地をめぐり、その生命の痛ましさやご遺族の悲しみ、「何故、逃げられなかったのか」と思う等しました。同時に、保育にかかわる者として、非常時のとっさの決断と事前の心構えの必要性を通感しました。

鎮魂と復興の決意が込められた「がんばろう石巻」の看板の前には花と線香が供えられ、多くの人が集まっていました。私も津波の光景を思い浮かべながら合掌しましたが、あまりの痛みの体験に、全身が縛られる感じを受けました。

女川町アスレチック広場に寄った時のことです、少女2人が職員の伊藤さんに嬉しそうに走り寄り、すがりついてきました。彼が「もう行かねばならない」と言ってもなかなか離れようとしません。その姿を見ていて、この子たちは心にストレスをためて、それが甘えの形で出ているのだなと思うと同時に、伊藤さんをはじめボランティアたちがゴーとすさまじい音を立てしてきた遊び広場が、どんなに子どもたちに親しまれていたかを感じました。

仮設住宅の渡波第2団地々に臨場感をもって話して下さいました。懇談の最後に白髪の婦人が、「これからを切り開いていかねばならない」と固い決意を述べられました。ひもじかった」等を口から、どれだけ多くの励ましを受けたかわかりません。」と言われました。

被災地の人たちの深刻な体験は今も続いていることを印象付けられると共に東京YMCAの支援活動の意味を実感し、これから私のできる方法で、もっと支援活動に積極的に加わっていかねばと思いました。

↑東陽町センター１階の会場はガラス張で、多くの来場者の目を引いた。

↑展示パネルを塗りなおす委員たち。

第16回会員芸術祭

力作60点　東陽町を彩る

「第16回会員芸術祭」が6月17日から22日に開催され、会員や関係者など44人から計60の作品が出展された。会場は東陽町センター1階の多目的室。昨年の内装工事でガラス張りとなった会場で、多くの来館者が足を止めて、絵画、書画、写真、陶芸、手芸、彫刻などの個性あふれる作品との出会いを楽しんでいた。

会期に先駆けて催された6月15日（土）のオープニングセレモニーでは、出展者のうち希望者には菅谷功先生（新槻樹社会員）からの講評があり、またアートナビゲーターの文屋信男さんによる絵画にまつわる興味深い講演をお聞きするなど、参加者同士の良い交流の場となった。

会期中の受付ボランティアは在京各ワイズメンズクラブの全面的なご協力をいただいた。

会員芸術祭実行委員会が準備から撤収まで運営全般を担ったが、会期前に実行委員が集まり展示ボードのペンキ塗り作業を一日かけて行い、白くきれいになったボードに作品を展示できたことにも感謝したい。

（会員部　戸坂昇子）

世界YMCA同盟総主事

ヨハンさん　来日

石巻も訪問、ユースエンパワーメントに意欲

ヨハンさんご夫妻と、廣田光司東京YMCA総主事

6月18日、世界YMCA同盟総主事ヨハン・ヴィルヘルム・エルトヴィク氏夫妻が東京YMCAを訪問された。6月15日～16日に開催された「日本YMCA同盟協議会」に招かれ講演を行い、その後、ローカルYMCAの訪問を希望され、実現となった。ヨハン総主事は、ノルウェー出身のルーテル教会牧師であるが、1986年よりYMCAスタッフとなり、前任はヨーロッパYMCA同盟総主事であり、ベルリンの壁崩壊後、ヨーロッパ各国YMCA再建に尽力された。

東京では、東陽町センター、グランチャ東雲、そして、しののめYMCAこども園を訪問され、チャイルドケアが多彩に行われていることに多いに感心され、児童・高齢者交流プログラムにも興味津々であった。

その後、仙台、石巻にも足を伸ばされ、YMCA石巻支援センターも訪問された。今なお継続される支援活動の一翼を担っていることに、常駐の東京YMCAスタッフ伊藤氏へも励ましの言葉を掛けられた。

ノルウェーという国自体大国に翻弄された歴史を持ち、平和維持の大切さをしみじみ感じ、外交的な努力を常に行う姿勢が染み付いているとのこと。同盟総主事として特にユース・エンパワーメントに力を注いで行きたいと抱負を語られた。

（本部事務局　本田真也）

東日本大震災復興支援

「わいわいキッズ in 郡山」

リーダーと一緒　だから楽しい

6月29日（土）、福島県郡山市の「郡山ザベリオ学園」を会場に、屋内子どもプログラムを実施し、子ども39名を含む約70名が参加しました。郡山での屋内プログラムは2月に引き続き今回で2回目となり、プログラムの名称を「わいわいキッズｉｎ郡山」と名付けました。子どもたちがボランティアリーダーと共に元気に、楽しく身体を動かせる時間としたいとの願いが込められています。

前半はスタッフやボランティアリーダーが全体プログラムとしてレクリエーションゲームを指導して緊張を解きほぐし、後半はドッジボールや長縄、前回も人気だったガガなど子どもたちが遊びを選択する時間としました。今回は新たにアヒルホッケーも紹介し、大いに盛り上がりました。

すべての人を一つにしてください

映画『独裁者』から

今もなお屋外での活動がMCAの屋内プログラムは制限されている中、参加者からは「ボランティアリーダーやスタッフによるレクリエーション指導がある今後定期的な開催を視野にいれて計画をしています。

（会員事務局　村上祐介）

「私は皇帝になりたくない、支配するよりも人びとを助けたい、ユダヤ人も黒人も白人も、人類とはお互い助けあうもの、他人の不幸よりも幸福を望み、憎しみ合うべきではない、地球には全人類を包む豊かさがある、（中略）人を愛することを知ろう、愛があれば憎しみは生まれない、兵士よ自由のために戦うのだ、神の王国は人間の中にある、君の中にも人々の中にも、すべてを創造する力は君達の中にあるのだ、自由で希望に満ちた世界を、民主主義の名の下に一つに団結しよう、新しい世界の為に戦おう（後略）」映画『独裁者』より。チャップリンの映画でヒットラーに成りすましたユダヤ人の床屋がラストシーンで行う演説です。この映画はヒットラーの独裁時代まさにその絶頂期に製作されました。

今年も8月15日を迎えます。戦後68年、日本は平和憲法の存在により戦争で他国を脅かすことなく平和を守り、世界から「尊敬される国」になりました。

戦争の記憶を持たない世代が圧倒的に増えてきた今こそ、日本はもっとレベルの高い権威によって守られ、充分世界の中で存在感を持ち、攻撃を受ける国ではなくなっていることを共有したいものです。改憲論議が盛んですが、私は憲法を変える必要性を感じません。世界に誇る平和憲法を守りたいと切に思います。

私たちの先達が68年かけて築き上げてきたものを受け継いで行きたいと思うのです。

（総主事　廣田光司）

ワイズメンズクラブ

東日本区大会　岩手で開催

6月8日（土）～9日（日）、花巻温泉・ホテル千秋閣で、『第16回　ワイズメンズクラブ東日本区大会』が開催され、460人余りが参加した。もりおかワイズメンズクラブのホスト及び、仙台、仙台青葉城、仙台広瀬川、北東部の各クラブが協力し、駒田勝彦東日本区理事年度を飾る大会として行われた。

今回は、東日本大震災からの復興、「わすれてたまるか　3.11　あの時の絆を」をテーマに、開催地岩手ならではの特色ある大会となった。特に、記念講演では「震災から復興へ」と題し、陸前高田市長の戸羽太氏が、奥様を失い、幼い2人の息子さんの父親として、市長として、毅然と復興へ立ち向かわれるご様子に感動をいただいた。

大会後、陸前高田、気仙沼と各被災地を訪問し、震災から丸2年が経過してもなお残る津波の爪痕を目の当たりにした。たった一本残った奇跡の一本松には、命の象徴であると共に希望を与える存在であるということを、改めて認識されたことでしょう。

（東京世田谷ワイズメンズクラブ　小原武夫）